（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所属：（学部（研究科）・学年）教育学部国語科１年

氏　　名:下吉 可奈子

授業科目名	南米における進取の気風研修
研修先（国・地域） 滞在地	ブラジル・サンパウロ州、アマゾナス州
研修期間	平成 28 年 9 月 15 日～平成 28 年 9 月 30 日

〔研修を通じて得た成果〕

わたしは、この研修を通してさまざまな知識を得ることができた。わたし自身、海外渡航が初めてで、不安に思うところが多かったが、緊張感を持って過ごしていれば全く問題なく日々を過ごすことができ、考えていたことがほとんど取り越し苦労であった。また、約 2 週間の生活のなか、日本と異なる文化や慣習で戸惑ったり、慣れなかったりしたことが多々あり、不便に思ったこともあったが、かえって時間やものを大事にしようと思えるようになり、よい経験になった。そして、サンパウロ州のブラジル日本移民史料館や東山農場では、日系ブラジル人が差別を受けながらも、どのようにして異国の地で名誉や地位を築き上げてきたのか、詳細を知り、学ぶことができた。ブラジルを訪れる以前に、日系人とブラジルの歴史について年代ごとにまとめていたが、今回史料を交えて、一筋縄ではいかない苦難や事件に対応してきた日系ブラジル人に改めて感心した。アマゾナス州の Djlma Batista 校では日本語とポルトガル語のバイリンガル教育から、日本人の礼儀正しさを学んでいるという話を聞き、世界で英語が主流であるなか、ブラジル人が日本語を学ぶ意義について考えさせられた。また、同じくアマゾナス州のアナヴィリャーナス国立公園では、少人数のスタッフで貴重な動植物を保護していきながら、共存することの難しさを知り人々に保護活動を知ってもらいながら、動物に負担をかけないようにしていくことがどれだけ大変であるかを学んだ。

〔研修後の抱負〕

より深くポルトガル語を学んでいくとともに、ドイツに留学したいと考えているため、ドイツ語の勉強に励んでいきたい。そして、日本語教師を目指しているため、現在の国語専修や初等・中等の講義以外にも日本人学校の教員セミナーを受講し、勉強したいと考えている。ドイツ語だけでなく、英語も引き続き学んでいきたい。

（記入にあたっての注意）この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細（複数頁可）に記載をお願いします。冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。また、パソコンでの作成を原則とします。

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者
所属：理学部生命化学科・2 年
氏　　名:下舞凜子

授業科目名	南米における進取の気風研修計画
研修先（国・地域） 滞在地	ブラジル　　サンパウロ・マナウス
研修期間	2016 年 9 月 15 日　　～　　2016 年 9 月 30 日

〔研修を通じて得た成果〕

この研修には、ただ南米という遠く離れた未知の場所に行ってみたいという好奇心だけで参加した。そして実際に赴いたブラジルは想像以上に濃く、魅力的な国だった。

最初はサンパウロで、主に日系移民について学んだ。東洋人街散策では、出店を開く日系2世の方に話しかけられた。彼はブラジルでの生活の一部を話してくれた。日本で起こる災害を、ニュースで見ていつも心配しているとのことだった。一方でご自身も、治安の悪いブラジルでは家を出ると怖い、とおっしゃっていた。日本国外で生まれ育った日本人の方と話すのは初めてで、とても不思議な感じがした。サンパウロには多くの県人会が設立されていた。2 日目の夜は鹿児島県人会の方々が歓迎会を開いてくださり、貴重なお話を聞くことができた。その日の午後は移民資料館へ見学に行ったこともあり、ブラジルに移住した日本人の苦労や成功を知った。日本人がブラジルに移住した背景には歴史的・政治的な問題が大きく関わっており、その波に左右されながらもブラジルで生き抜いてきた日本人は私の曾祖母のように戦後を日本で生き抜いた人々とはまた違った強さを持っていた。勝ち組・負け組の衝突、現地での厳しい生活、私の知らなかった戦後の歴史が地球の反対側にあった。

マナウスでは、成果というより一生の宝物を得た。ホームステイを受け入れてくれたアマゾナス連邦大学の学生はいつも私たちを気にかけてくれ、最高のおもてなしをしてくれた。それは私たちを客人のようにもてなしてくれたのではなく、彼らの生活に抵抗なく受け入れてくれたということである。私はブラジルの文化に浸かり、その環境やリズムを肌で感じることができた。インフラが整っていなかったり、道が悪かったり、日本に比べて決して快適な生活とは言えなかったが、むしろ日本での生活を省みる良い機会となった。また、日本で生活していてあまり考えさせられないのが環境問題である。マナウスでは、国立公園に指定されているアナビリャーナス群島にも訪れた。そこでは私たちのように訪れる人に対し、エコツーリズムが行われていたのが印象的だった。またアマゾナス連邦大学で行われた学会では引率の酒井先生によるアグロフォレストリーについての講演を聞き、ブラジルの環境問題に改めて興味を持つきっかけとなった。

私の得た成果は一言で言い表せるほどはっきりとした形にはならなかったが、多くの経験を通してまた一つ、違う価値観を手に入れたと感じている。

〔研修後の抱負〕

研修に参加する前の先入観は、現実と全く異なっていた。メディアが伝えるのはほとんどがブラジルのマイナスイメージであった。しかし現地では目が合うと微笑みを返してくれる人が多く、実際に今回出会った人々はとても親切だった。百聞は一見に如かず、ということを痛感した。よって、今後も積極的に外に出て学びたいと思う。そして様々なバックグラウンドを持つ人と話したい。そのためには語学が重要であることも実感した。海外にただ行くだけではなく、語学を含めた豊富な知識を、残りの大学生活で身につけたい。

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者
所属:（学部（研究科）・学年）水産学部水産学科　3年
氏　　名:中村　潤平

授業科目名	南米における進取の気風研修計画
研修先（国・地域） 滞在地	ブラジル（サンパウロ、マナウス）
研修期間	2016 年 9 月 15 日～9 月 30 日

〔研修を通じて得た成果〕

私が研修を通じて得た一番大きな成果はアマゾン川の現状を知れたことである。以前よりアマゾン川に興味があり、特に魚類を中心とした生態系に関心があった。今回の研修ではノヴォ・アイラス州のアナヴィリャーナス国立公園の探索を行いアマゾン川（ネグロ川水系）の生物多様性、環境保護について学び、そこで見たアマゾンの自然に感動した。写真や動画で見るものとは違う実際に現地に行って見て初めて分かる本当の自然の姿とそれを取り巻く現状を知った。また、アマゾナス連邦大学の水産学部に訪問し大学が行っているアマゾン川に関する研究を見せていただいた。私と同じ水産学部生がアマゾンで何に取り組んでいるか、どのような研究方法を行っているのか各研究室で実際に教授や学生から話しを伺えたことは大きな成果だ。そして私もこの場所でアマゾン川の魚に関する研究をしてみたいと思える内容だった。マナウスの魚市場ではアマゾン川の魚の流通過程を見ることができ、現地でどのような魚が出回っているのか知ることができた。日本とは全く異なる魚の種類ではあるが、数種の養殖魚と限られた消費者に好まれる天然魚がほとんどを占めている市場の光景は日本と似ていると感じた。その一方、市場で流通している魚はほぼすべてアマゾン流域の淡水魚で海水魚や輸入魚が見当たらない点は日本と違うと感じ勉強になった。このように今回の研修ではアマゾン川が今どのような状況に置かれているのか、リアルタイムで行われている研究や保護活動そして食用魚という恩恵を知り今後の学部での研究に役立つ情報を得た。

また、ブラジルの歴史、文化、社会、言語そして日本人移民や日系人社会、国民の日本に対する意識を学んだことも大きな成果であった。サンパウロ滞在中は移民資料館や東洋人街リベルダーヂ、東山農場、現地の新聞社であるニッケイ新聞に訪問したことやサンパウロで暮らす日本人の方と食事会を行うことで 100 年以上の歴史がある日系ブラジル人や現地での日本人について深く知った。長い歴史の中で日本人移民は多くの苦難を乗り越え日本の文化を守りながら生活してきたことで現在の日系人社会があると理解した。マナウス滞在中は主にアマゾナス連邦大学の日本語学科の学生宅にホームステイしコミュニケーションを図りながらマナウスでの日本とは常識の異なる学生生活を体感した。ブラジル日本語研究国際学会への参加やアマゾナス連邦大学の学生との交流、バイリンガル学校への訪問を通してブラジルにおいて日本語に興味を持ち学習し日本に対して好感を持っている人が多くいるという事実を改めて感じた。言語に関してポルトガル語を日常会話ができるレベルで習得することはできなかったが言葉が通じなくても理解しようという気持ちがあればコミュニケーションは取れると分かった。そしてなんとか理解しようとすることでポルトガル語の実践的な学習になった。アマゾナス連邦大学において英語で鹿児島の魅力を伝える発表をする機会もあり語学力向上の成果があったと感じた。

〔研修後の抱負〕

南米研修を通じてブラジルが好きになった。実際に行くまで知らなかった本当のブラジルの姿を知り必ず再訪しようと決意した。特にアマゾン川での魚類の研究に強い関心がある。アマゾナス連邦大学への留学も視野に入れていて今後ブラジルとはずっと関わって行きたいと考えている。そのために何が必要か考えてみると第一にポルト

ガル語、英語の語学力だと感じた。現地では日本語学科の学生から手助けを受けながらの日常生活だったため今の私の語学力ではひとりで生活していくのに不自由な点が多いだろう。そのため次にブラジルを訪れるまでに現地での生活の上でコミュニケーションがきちんと取れるよう語学を学ぼうと考えている。次にどんな環境でも馴染めるよう適応力も身に着けたい。日本と全く異なる環境での生活は心身ともに負担がかかるものと今回感じた。文化や食事の違いでストレスになることもあるだろうから異なる文化の背景を理解し体調の自己管理ができるようになろうと思う。また、今回の研修で新しい発見がたくさんありとてもブラジルが好きになったが、もっと行ったことのない国に行ってみたいと思うようにもなった。世界の国々について知らないことだらけで訪れたことのない国はイメージだけで決めつけている部分があると思う。知らない土地に訪れる面白さを覚えてしまったのでこの先どんどん海外に行って多くのことを学ぼうと考えている。南米研修で素晴らしい経験をたくさん積むことができたが、次は自分の力で計画し行動するようにしたいとも感じた。よく言われるように今後はグローバルな人材が求められる社会になるだろう。ブラジルで得た経験や縁を活かし、将来に向け世界で通用するようどんどん行動していこうと思う。

（記入にあたっての注意）この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細（複数頁可）に記載をお願いします。冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。また、パソコンでの作成を原則とします。

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所属：（学部（研究科）・学年）　水産学部１年

氏　　名:中塚宇宙

授業科目名	南米研修
研修先（国・地域） 滞在地	ブラジル
研修期間	9 月 15 日～9 月 30 日

〔研修を通じて得た成果〕

この研修に参加して得られた成果は大まかに二つあります。

一つ目は、メディアなどから受ける印象と、実際はまったく違うということです。

日本人から見たブラジルは「治安が悪い」というイメージで、そのせいで人も乱暴であるというように思っている人も多いです。しかし実際にブラジルの人と触れ合ってみるとみんな親切で、とても親しげに話しかけてきてくれます。日本人は初対面で積極的にコミュニケーションをとろうとする人は少なく、仲良くなるのにも時間がかかりますが、ブラジルで出会った人とはすぐに仲良くなれ、二週間という短い期間でしたがブラジルで多くの親友もできました。物事を印象で片付けるのはよくなく、実際に行ってみたり、やってみたりしなければわからないということが理解できたことが、私が今回の研修において得た最も大きい成果だと思います。

二つ目は、アマゾンの自然保護について学べたことです。私は環境保護に興味があり、将来そのような分野に進めたらいいなと考えているので、今回の体験は非常に有意義なものでした。特に現地で保護活動を行っているレンジャーの方や、保護活動の煽りを受けて元の暮らしができなくなった現地のコミュニティの方から直接話を聞くことができたのは自分の将来を考えると非常に貴重な体験で、日本とは規模が違いすぎるため考えもしなかった問題が数多くあり衝撃を受けました。一言に「環境保護」といっても国や地域でまったく異なるということを実感し、日本だけでなく世界の環境保護活動にも目を向けていこうと思いました。

〔研修後の抱負〕

この研修を通じて、得た経験はすべて今後の人生に大きな影響を与えるものであると思います。特に自分の進路決定の際には上述したような経験が非常にためになると思いますし、そうしていかなければいけないと思います。日本で環境保護活動に携われればよいなと考えていましたが、世界には自分が知らないような環境保護活動を行っている方もたくさんいるということを学んだので、日本に限らず世界に目を向けて今後の就職を考え、それに向けて努力していこうと思います。

（記入にあたっての注意）この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細（複数頁可）に記載をお願いします。冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。また、パソコンでの作成を原則とします。

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所属：（学部（研究科）・学年）工学部・1 年

氏　　名:大山奈月

授業科目名	第 6 回南米における進取の気風研修計画
研修先（国・地域） 滞在地	ブラジル・サンパウロ、マナウス
研修期間	9 月 15 日　～9 月 30 日

〔研修を通じて得た成果〕

今回の研修で学んだ事は主に日系ブラジル人の移民についてとアナヴィリャーナス国立公園についてである。移民資料館に行き日系ブラジル人の移民の歴史を学んだ。最初は奴隷としてブラジルに連れてこられたと知り、同じ日本人として何も知らなかったことを恥ずかしく感じた。初めの日系ブラジル人の恩恵により、今ではブラジルで日本人は温かく迎えてもらえたり、日本の文化が浸透しているのだと学んだ。アナヴィリャーナス国立公園では原住民との問題があることも学んだ。日本にいるときには、環境を保護する事はとてもいい事であるとしか考えていなかった。しかし釣りを禁止するなど保護しすぎると元からその場所に住んでいた人々の暮らしに問題が生じることも教えていただいた。また、今回の研修で身に着けた能力としてはプレゼンテーション能力である。ブラジルの学会に参加し、鹿児島の魅力に関するプレゼンテーションを行った。その時に英語で発表するのだが、最初の頃は英文丸ごとを覚えようとしていた。その時に先輩から覚えるのは日本語だけでいい事を教えていただいた。現地でもプレゼンテーションの練習を行ったのだが、その時にブラジル人の女性から、プレゼンテーションはしっかりと相手の目を見て語りかけることが大事なのだと教わった。私はいつも一方的に話しているだけだったので、今度からは質問も取り入れたプレゼンテーションを行っていこうと考える。学会でほかの大勢の方のプレゼンテーションを見る機会があったのだが、多くの方が身振り手振など体全体を使って表現なさっていたので、今後の参考にしていこうと考えた。

〔研修後の抱負〕

私は今回の研修で英語の大切さを学んだ。お互いの母国語が分からないときには英語でよく話した。普段英語で会話しなれてない事もあって、会話の 4 割程度しか聞き取れなかった。なので今後は普段使える英語を勉強し、周りの留学生にどんどん話しかけて英語力を向上させていく所存である。また、ブラジルという国が大好きになったので、ブラジルと日本の今の関わりについて学習していこうと考える。

（記入にあたっての注意）この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細（複数頁可）に記載をお願いします。冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。また、パソコンでの作成を原則とします。

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者　森光里

所属：（学部（研究科）・学年）法文・2 年

氏　　名：森　光里

授業科目名	第 6 回南米研修
研修先（国・地域） 滞在地	ブラジル（サンパウロ、マナウス）
研修期間	2016. 09. 15　　～2016. 09. 30

〔研修を通じて得た成果〕

ブラジルに住む人々との交流で私は内面的な部分をもっとも吸収できたと思っています。研修を通じて、何かを待っているのではなく、自分から興味関心をもってそれを追及する姿勢の大切さ。興味のないことでもやってみたら楽しかったりすることがあって興味がないからといって何事もやらないのはもったいないということにも気づいた。そして、現地の方々とのコミュニケーションを通じて、言葉が分からないからこそ、相手が何を考えているんだろうかとか自分に伝えようとしているんだろうか、と考えたりして、普通に言いたいことが伝わる日本にいるときよりも、周りの人を思いやる姿勢が持てたと思います。活動中に仲間が一人でいたいと言っていることがありました。集団生活の楽しさ、難しさもたくさん学びました。でも何かをするときに協力できる仲間がいることは異国の地でとても心強く感じるものがありました。自分自身はあまりその点で、悩むことはなかったが朝早く目が覚めて屋上に行ったら、誰もいない中太陽が昇る前の空を見てとても気持ちがよかったことがありました。規律の中でこのように自分の時間をうまく作ることも大切なのかなと感じました。自分たちのプレゼンをする機会があって、たくさんの方にアドバイスをもらったのですが、発表中に意見をどんどん言ってこられました。日本人的には人が発表しているときはまず聞こうよと空気を読まないと思うところですが、自分の意見をあれだけ堂々と場面関係なく言えるのは日本人として本当に見習わなければならないと思いました。ホンダの工場見学ではどんなに苦境に立たされても、自分の夢の実現に向けて頑張ることが人生で大事なことだという、これからの私たちの人生の指針となるようなお言葉をいただきました。彼らが本当に苦労しての今があるからこそ、とても説得力がある言葉で胸にずしんと響きました。またそこでは日本人の方も活躍していて、私は彼らの話を聞いて、とてもうれしくなりました。日本人のグローバル社会での可能性を感じました。外国人に勝てない人間性もあるけど、気を利かせることができたり、仕事の細やかさだったり、日本人らしさを生かしていくことも大事なのだと肌で感じました。また、活動全体を通じて人の出会いの大切さを身に染みて感じました。今回引率して下さった先生方、2 週間ずっと一緒だった仲間たち、現地で温かく受け入れて下さったホームステイのみなさん、学生たち、また現地でお世話になったすべての方々。今回、ブラジルに行こうと決心しなかったら出会わなかった人もたくさんいると思います。ましてや地球の反対側なのだから。すべてのひととの出会いに感謝しながらこれからも出会う人との縁を大切にしていこうと思いました。そして、どんな環境に身を投じる勇気が持てました。これだけメディアで危険だと騒がれている国に行くことを許してくれた家族にも感謝しています。今回、無事に帰ってこれて自信もついたし、これからも新しいことにどんどん積極的に挑戦できるような気がします。

〔研修後の抱負〕

現地の方々との交流を通じて、痛感したのがコミュニケーションの壁でした。もちろん、ジェスチャーでもなんとか言いたいことは伝えられるのですが、英語が通じない環境の中で感じたのが、世界はやはり多様性があるということ。より多くの人とかかわるためには、言語力を身に着ける必要がある、改めて思いました。そして、異文化理解という点でも、世界にはもっと日本とは異なる文化を持った国が存在します。今後は、もっとたくさんの言葉にふれ、人と交流し、広い目で世界を見れるようになりたいです。そして、海外に行くたびに日本の持つ魅力を再発見できている気がするので、それを逆に海外に発信して日本のことをもっと知ってもらったり、日本に訪れる人を増やしていくことができたらと思っています。

（記入にあたっての注意）この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細（複数頁可）に記載をお願いします。冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。また、パソコンでの作成を原m則とします。

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所属：（学部（研究科）・学年）農学部二年

氏　　名:牛川　太郎

授業科目名	第六回南米における進取の気風研修計画
研修先（国・地域） 滞在地	ブラジル
研修期間	2015 年9月 15 日　～9 月30日

〔研修を通じて得た成果〕日本の文化とくに鹿児島の歴史、自然、食文化を中心に大学生を中心としたブラジル人に日本の魅力や鹿児島の魅力を伝え日本に行きたいなと思ってもらえるような発表や交流をして、交流した人に鹿児島の特産品や観光地を教えることができた。鹿児島に是非行きたいと言ってくれるブラジル人や鹿児島大学に留学したいと頑張って今勉強している人も作ることができた。鹿児島という世界で見てもいや日本の中でもあまり有名でない土地をここまで魅力を伝えることができたのは大きな成果だと思う。今回研修に参加した鹿児島大学の学生１１人のメンバーの一人一人の魅力も大きく鹿児島の魅力の一つに少なからずなったのだと思う私は向こうで一週間ほどホームステイをした。私はホームステイを外国でしたことはなかったのでとても不安だったがホームステイを受け入れてくれた学生やその家族や友人さらにはその友人の彼女やお母さんまで私にとても親切にしてくれた。ホームステイ先の家庭は家族をとても大切にする家庭で私は家族を大切にしていないことはないが大学生になり一人暮らしをしているので家族で食事をあまりすることもないのでもっと家族を大切にしたいなと思った。ブラジルでホームステイをしたことでブラジルの観光地ではない普通の生活をすることができ文化を肌で感じることができた。戸惑うような文化もあったがその文化を知るだけではなく体感したことで、多種多様な物の見方を身に着けることができたと私は思う。私がホームステイした学生が後期から一年間鹿児島大学に留学生として鹿児島に来ている私たちの伝えた鹿児島が彼にどのように伝わっていたか確認しながらお互いに良き友としてより良い国際交流のある大学生活を送っていきたい。

〔研修後の抱負〕私は今回の研修を経て色々なものの見方を得ることができた。鹿児島大学にブラジルから留学している彼と鹿児島の屋久島をピイアールするための動画をつくるために行く。この動画は日本語英語ポルトガル語で世界に発信して向こうで出会ったブラジル人に見てもらい日本に私たちが帰ってきても日本から鹿児島の魅力を伝えていかなければならないと思う。この研修で学んだことを難しいがこれから行動し次のステップに挑戦したい。その次のステップは各々研修に参加したメンバーでも異なると思う。私はポルトガル語と英語を話せるようになりブラジルで学ぶことができるように毎日少しずつ頑張りたい。

（記入にあたっての注意）この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細（複数頁可）に記載をお願いします。冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。また、パソコンでの作成を原則とします。

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者
所属：（学部（研究科）・学年）理・地球環境 3 年
氏　　名:田中　美保

授業科目名	第 6 回南米における進取の気風研修計画
研修先（国・地域） 滞在地	ブラジル（サンパウロ・マナウス）
研修期間	2016.9/15　　～2016.9/30

〔研修を通じて得た成果〕

サンパウロでは日系移民の歴史や現在の暮らしについて学び、日系移民がどのように苦難を乗り越えてきたか知ることができた。日本人町では屋台を廻り、日本の食文化が受け継がれていることに驚いたが、かき揚げやえび団子のようなものが「天ぷら」と称されているなど日本との差異も見られたことが文化の伝授における変化という点で興味深かった。マナウスでは日本に興味をもっているブラジル人に対して彼らが日本に興味をもった理由や鹿児島の認知度等に関するインタビューを行い、ブラジル人の来鹿を促す方法を考えるための多くのデータを集めることができた。また、ホームステイやアマゾナス連邦大学の学生との交流を通してブラジル人の価値観や暮らしについて詳しく知ることができた。ブラジルでの滞在中、障がい者や人種の違い等による差別のなさを感じたが、現地の人々と話してみると、差別がないなどとは思っておらず、ブラジルについて聞くと治安が悪いなどといったネガティブなイメージを挙げる人がほとんどだった。このようなブラジル人の姿勢から自分たちも自国の悪いところに目を向けなければいけないと改めて感じた。加えて最近の漫画やアニメなどのサブカルチャーにおける同性愛の表現等を通して、日本は同性愛者に対する差別が無いのではなどと、実際の日本の姿とは異なるイメージを抱いていた人もおり、日本のサブカルチャーの影響力の大きさやそれによる利害についても考えることができた。このような踏み込んだ話が聞けたことは自分の価値観や視点を広げる点で非常によかったと思う。特にホームステイは日本語学科の学生との仲を深められただけでなく、日本語の通じない家族ともお互い不慣れな英語やジェスチャー、ときには電子・紙辞書やインターネットまでも用いて交流し、伝えようという意思があればコミュニケーションをとることができるのだという自分への自信にもつながった。

街の様子や人々の価値観・文化・歴史だけでなく、アマゾン川クルーズといった自然体験を通してアマゾン川の広大さや目にする動植物の多さなどブラジルの自然の豊かさを実体感することができた。ピラニア釣りやピンクイルカとの触れ合い等においては日本では水族館やテレビでしか見られない生物の自然の姿を観察・触ることができ、とても貴重な経験ができた。中でもアナヴィリャーナス国立公園ではブラジルの抱える自然保護の問題点や観光産業への取り組みについても学ぶことができた。街中でも日本と違った鳥や花など動植物を見る機会は多く、見るものすべてが新鮮だった。その他、Honda 工場ではいろいろなことに疑問を持ち、自らが基準を作り出そうとする日本企業の姿勢や Djlma Batista 校では日本との教育方針の類似点や違いについて知ることができた。今回の研修では現地人と行動をともにし、より現地に即した体験ができたことで、日本との違いを直に感じ、メディアから受け取ってきた印象との相違や日本の長所・短所について考えることができたと思う。

〔研修後の抱負〕

今回の研修を終えて、また海外に渡航したいという気持ちが以前より一層高まった。今まで、卒業後の進路については自分の希望も曖昧で突き詰めて考えることができていなかったが、留学等を含めたいろいろな形での海外渡航を進路の選択肢の一つとして考えていきたいと感じている。そのため、今後は海外の人ともっと円滑なコミュニケーションをとることができるように英語を基本とした語学学習に励みたいと思う。また、ブラジルには再び渡航したいと考えているため、ポルトガル語やブラジルの文化・自分が興味を持っている分野である自然などなど更に詳しく学んでいきたい。

（記入にあたっての注意）この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細（複数頁可）に記載をお願いします。冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。また、パソコンでの作成を原則とします。

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者
所属：（水産学部（研究科）・2年）
氏　　名：菅野　和樹

授業科目名	南米における進取の気風研修
研修先（国・地域） 滞在地	ブラジル（サンパウロ、マナウス）
研修期間	平成 28 年 9 月 15 日～平成 28 年 9 月 30 日

〔研修を通じて得た成果〕

主な研修場所：サンパウロ市（ニッケイ新聞、東洋人街リベルダーヂ、移民資料館）、カンピーナス市（東山農場）、マナウス市（Honda工場、Djima Batista 校、アマゾナス連邦大学、アマゾン川、Anavilhanas 国立公園、マナウス市内）

サンパウロ市では日本とは全く異なった文化・社会（ストライキが街のいたるところで起こっていたり、しばしば危険なデモが頻発していたりといった日本とのソーシャルな違いも含めて）ブラジルらしい文化を知ることができた。また、現地に住む日系人・日本人からお話を聞かせていただいたり、移民資料館を見学したりして、今まで自分が全く知らなかった日系移民の背景と歴史について知識を身につけることができた。移民資料館には意外にも、鹿児島県知事からの寄贈品があり、鹿児島県とブラジルが深く関係があったことが目に見えて分かった。

マナウスの方では Honda の工場見学で日系企業がブラジル社会にどのように結びついて影響しているのかを学ぶことができた。また実際にブラジルで駐在員として活躍している日本人の方の話も聞くことができた。

日本語とポルトガル語のバイリンガルの学校見学では、州が学生たちに日本への留学や日系企業への就職を推進するために日本語教育に力を入れているということ聞き、日本から距離が最も遠い地域でこのような動きがあることに驚嘆した。私もこのような外から何かを学びいれるということを見習っていきたい。

〔研修後の抱負〕

今回の研修では、一緒に研修に参加した他の学生がしばしば、日本をすべての基準として考えてしまう、ということが気になった（例：ブラジル人はテキトーだ、車の運転が粗い、街が汚い・臭い、などなど）。自分もまだまだ日本を基準にしてしまうことが多いが、外国が初めて・外国に慣れていない人は何もかも日本を基準・中心にしてしまっているように感じた。これからの時代、外国人と関わる機会がよくあると思うが、このような考えでは外国人と良い関係が築けないと思うのでこの勘違いをなくしていきたい。

（記入にあたっての注意）この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細（複数頁可）に記載をお願いします。冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。また、パソコンでの作成を原則とします。

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所属：（学部（研究科）・学年）農学部　2 年

氏　　名:藤井　雄介

授業科目名	南米における進取の気風研修
研修先（国・地域） 滞在地	ブラジル
研修期間	2016/09/16　～2016/09/30

〔研修を通じて得た成果〕

ブラジルに移民した日系人、ブラジルで行われている農業、アナヴィリャーナス国立公園での自然保護などについて、実際に現地を見たり、現地の方々の話を聞いたりして、日本での事前学習において学んだこと以上にたくさんのことを学べた。中でもアナヴィーリャナス国立公園という保護区をつくることで、その現地に住む方々と、保護区をつくった政府との対立についてはとても興味がわいた。確かに、自然保護と呼べば聞こえはいいが、いいことばかりではない。その自然とともに暮らしている人の生活が制限されてしまうからである。現在では様々な政策がとられているが、完全に解決したわけではない。この対立のこれからと、今後どのようにアナヴィリャーナス国立公園が自然保護を行っていくかに興味をもった。さらに、今回の研修は、マナウスで過ごした 1 週間は、アマゾナス連邦大学の学生の家にホームステイをして、いつも現地の学生と行動を共にした。私のホームステイ先の方はあまり日本語が喋れず、やり取りは英語で行うことが多かった。日本語が喋れないのはなかなか大変ではあったが、慣れない英語でコミュニケーションをとるしかなかったのは、いい経験になったと思う。また、ホームステイ以外の学生とも本当に仲良くなれたのはうれしかった。また、現地のポルトガル語と日本語のバイリンガル学校があったり、日系企業が多々存在していた。。いままで、海外に行くとその海外のマイナス面を見て、日本って良い所だと感じていたが、今回は率直にブラジルにおける日本の良さを感じることが出来て、日本をとても誇らしく思えた。

〔研修後の抱負〕

私はアマゾンで行われている農業、アグリフォレストリーに関心を持っており、実際にその現場を見ることが出来たが、実際に現地で調査・研究をいてみたいと改めて感じた。また、アナヴィリャーナス国立公園における自然保護についても興味を持てた。アナヴィリャーナス国立公園では、調査の人手が少なく、アマゾナス連邦大学の学生であれば調査ができるという話も聞いたので、可能であれば鹿児島大学とアマゾナス連邦大学の協定での交換留学をして、現地で様々な研究をしてみたい。また、そのためのポルトガル語の勉強にも励んでいきたい。

（記入にあたっての注意）この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細（複数頁可）に記載をお願いします。冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。また、パソコンでの作成を原則とします。

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所属：水産学部水産学科・3年

氏　　名:鳴海　敦

授業科目名	第6回南米における進取の気風研修計画
研修先（国・地域） 滞在地	ブラジル・サンパウロ、マナウス
研修期間	2016年9月15日～9月30日　～

〔研修を通じて得た成果〕

サンパウロでは、移民資料館や鹿児島県人会との交流を通して、移民の歴史や日系人の現状を知ることが出来た。コロニアという日系社会を形成していたことや、太平洋戦争終戦後の日本の敗戦を信じない勝ち組や敗戦を信じる負け組との対立があったことなどを学んだ。また、東山農場では、コーヒーの栽培から出荷までの幅広い知識を学び、岩崎家の固有事業でその歴史も学ぶことができた。また、当時の移民の過酷な労働環境なども学ぶことができた。また、マナウスでは日系企業訪問を通して、地域開発や自然保護など社会貢献に取り組む日本企業の姿勢を学んだ。アナヴィリャーナス国立公園では、国立公園設立の歴史や目的、エコツーリズムの意義などを学んだ　。また、マナウスの日本語学科の学生との交流を通して、海外で日本に興味関心を抱く人がどのようなきっかけで日本に興味を持ったのか、非常に興味深かった。また、ホームステイを通して、マナウスの学生の日常生活を体験することができた。また、マナウスの市場見学を通して衛生環境の未熟さを感じ、衛生保持の技術の向上が求められていると感じた。また、多文化社会であることから、人種が入り混じっており、人種差別なども少ないということも実際に現地に行って分かった。

〔研修後の抱負〕

今回の研修を通して、ブラジルに移民した日本人の進取の精神を学び、海外へ進出した先人たちのことを学ぶにつれ、海外という幅広い視野を持ちたいという気持ちと異文化をさらに学びたいという思いが強くなった。今後は、もっとも公用語として広く使われている英語の学習により一層取り組み、海外へ語学留学をしたいと考えている。そこで、語学力を身につけ海外でも活躍できる人材へ成長し、貢献したい。

（記入にあたっての注意）この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細（複数頁可）に記載をお願いします。冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。また、パソコンでの作成を原則とします。